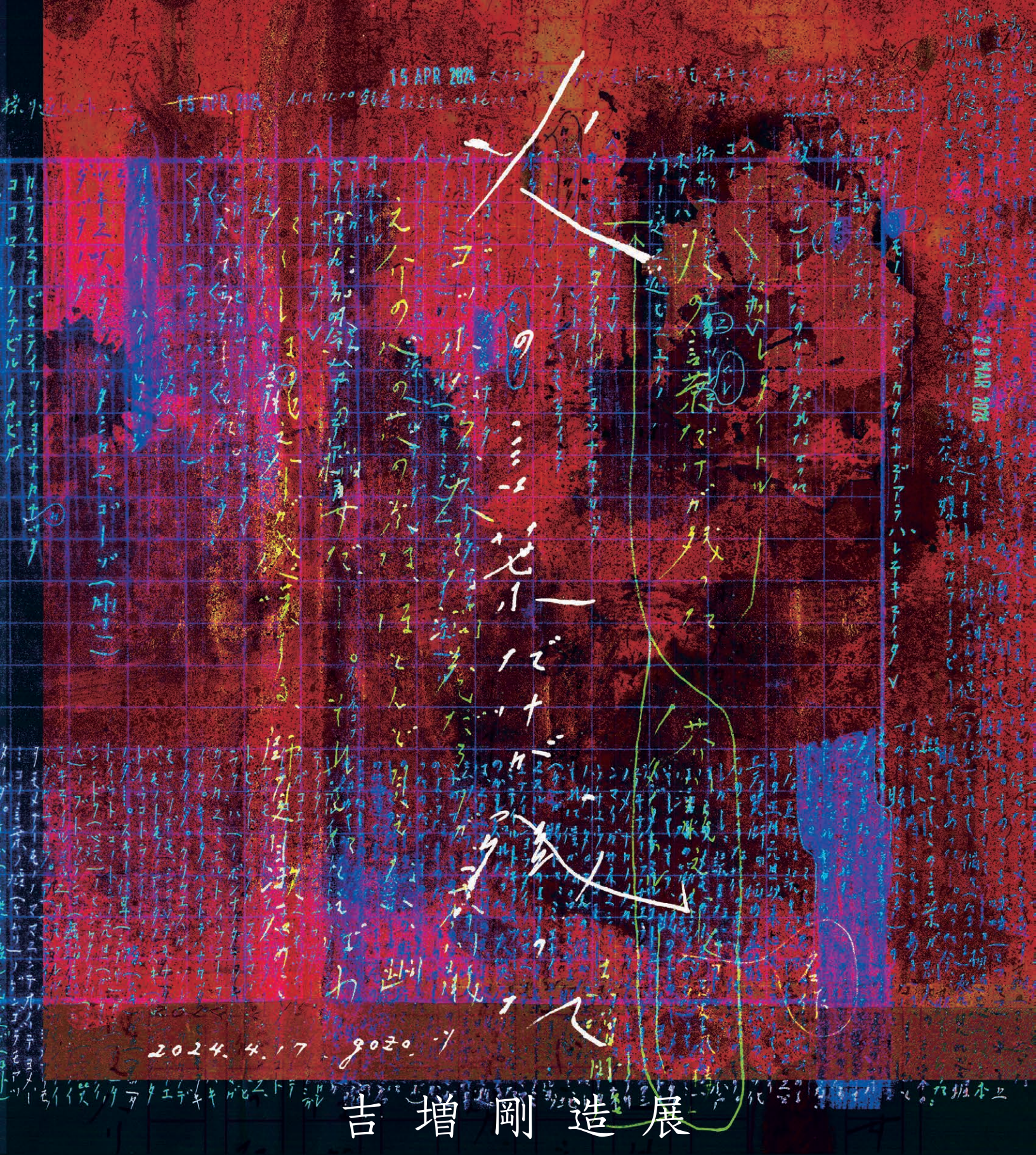




—火の言葉だけが残った—

2024.5.25 (Sat) - 6.23 (Sun)

■アクセス■

- ・東武伊勢崎線足利市駅徒歩 12 分・JR 両毛線足利駅徒歩 8 分
- ・北関東自動車道足利 IC より 15 分
- (駐車場 3 台・近隣にも無料駐車場あり)

- 11:00~18:00 (最終日は 16:00 まで)
- 月・火曜休廊 (月・火が祭日の場合は営業し、翌日休)
- 軽食とソフトドリンクもお楽しみいただけます。



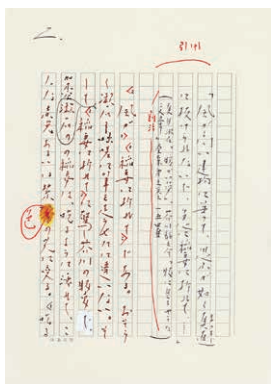
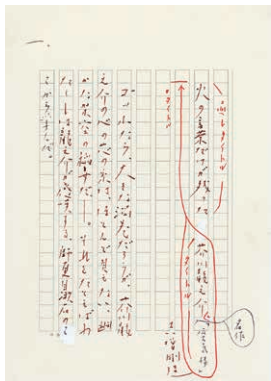
artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通 2 丁目 2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>



「火の言葉だけが残った」原稿
(1〜8のうち 1〜3) 2024 年

詩集『Voix』を世に出したあと、吉増剛造には、詩はもはや「白い言^{コト}」、つまり詩稿を燃やした後の「灰」であるほかないのかもしれない。拙著『全身詩人 吉増剛造』はそう結んだ。郷原佳以が言うように、吉増のテキストにおいて、エクリチュールの時間は「いま・ここ」において更新され、無限に多層化されている。しかし、「いま・ここ」という指呼詞はいくら書き換えられても、決して「いま・ここ」を指し示せない。吉増には大事なものがある。「日記性」「手紙性^{ヒトリゴト}」「独言性^{トモ}」「親友の名」乃消えないようニ、残りますようニ、と心懸けラれた」とある、それらはとても大切なもの、つねに「いま・ここ」に保持したいものである。では、どうするか。燃やすよりないだろう。

灰にするよりない。J・デリダ『火ここになき灰』の解説で、梅木達郎はこう述べた。「灰とはなにものかの名残や記号ではなく、なにかが取り返しようもなく失われてしまったことの痕跡である。失わないために、保持するために、すべてを燃やすこと」。そう、デリダに共鳴する吉増もまた、かけがえのない草稿を燃やそうとするだろう。G・アガンベンは、前衛芸術における芸術家による行為の遂行をカソリックの典礼になぞらえて、それが作品でもあるとした。ヨーゼフ・ボイスが、ウサギの亡骸を抱えて、絵の前で「美術とはなにか」をウサギに教え込もうとふるまう。その行為が作品であるなら、草稿を燃やす吉増のふるまいもまた、詩なのではないだろうか。火の言葉だけが残った——足利の artspace & café の一画で、それを確かめてほしい。

林 浩平（詩人・文芸評論家）



MANDARA メモ 2024 年



MANDARA でのパフォーマンス後に再構成された作品
2024 年

■ライブパフォーマンス■

出演：吉増剛造

5 月 25 日（土）15:00～

定員 30 名（要予約）

2,000 円（ワンドリンク付）



お問い合わせ

artspace & café

0284-82-9172



ホテルニューさか井にて 撮影：岩本圭司

吉増 剛造 Gozo Yoshimasu

1939 年東京生まれ。慶應義塾大学国文科卒業。在学中から詩作を始め、1964 年の第一詩集『出発』以来、先鋭的な現代詩人として国内外で活躍。同時に詩の朗読パフォーマンスを行い、80 年代からは銅板に言葉を刻んだオブジェや写真作品を発表。2016 年には個展「声ノマ全身詩人、吉増剛造展」を東京国立近代美術館で開催。2017~18 年には、個展「涯テノ詩聲（ハテノウタゴエ）」（2018 年）を足利市立美術館、沖縄県立博物館・美術館、渋谷区立松濤美術館で開催。2018~19 年には、福島県内の 3 館、福島県立博物館、はじまりの美術館、埴谷・島尾記念館文学資料で吉増剛造展を開催。2019 年、Reborn-Art Festival(石巻市)に参加。2020 年より、「葉書 ciné」を YouTube にて配信。2021 年『詩とは何か』（講談社現代新書）『Voix』（思潮社）出版。2024 年『DOMUS X』（コトニ社）出版。



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通 2 丁目 2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/

